

トーマス・ベルンハルトの『消去』について

－「消去」とテキストの問題性－

熊 沢 秀 哉

Über Thomas Bernhards *Die Auslöschung. Ein Zerfall.* -Die Problematik der Auslöschung und des Textes-

Hideya Kumazawa

1. 『消去』の問題性

トーマス・ベルンハルト（1931-1989）の『消去』（1986）は、ベルンハルトの生前において最後に出版された長編小説である。またテキストの長さも、彼の他の代表的な長編小説、例えば『石灰工場』（1970）や『訂正』（1975）の約二倍の分量となっており、ベルンハルトの作品の中では文字通りの大作となっている。

このような理由から『消去』は、ベルンハルト研究の中でも取り上げられる頻度は高い。ズーアカンブ社からは、『消去』研究についてまとめた単行本⁽¹⁾が出され、ベルンハルトの作品を研究対象とした博士論文の中にも、『消去』とその関連作品のみをテーマとするもの⁽²⁾が見られる程である。

本稿は、ベルンハルトのこの長編小説『消去』を考察対象とする。中心に置くテーマは、「消去」である。『消去』の主人公、フランツ・ヨーゼフ・ムーラウは、上部オーストリアのザルツカンマーグート地方にあるヴォルフスエックの城を所有する一族の次男である。ベルンハルトの他のテキストの主人公同様、家族と故郷に対し強いコンプレックスを抱えるムーラウは、ヴォルフスエックを離れ、約二十年来ローマに生活の拠点を置いている。妹の結婚式のためにヴォルフスエックに帰郷したムーラウは、いつものごとく家族と争い、二度と帰郷しないという決意と共にローマに戻る。そこでヴォルフスエックから、両親と兄が車の事故で亡くなったという電報を受け取る。『消去』のテキストは、この電報を受け取る場面から始まり、その翌日ヴォルフスエックに戻ったムーラウが死者の通夜と葬儀を行うまでを主な対象とするものである。

テキストの中でムーラウは、何度となく自分はヴォルフスエックの家族とは全く正反対の人間であると強調する。ヴォルフスエックの城の所有者として、ムーラウの家は中世以来の領主の家系である。しかしムーラウの親の世代においては、既に貴族的な属性はほぼ無くなり、林業、鉱山業、農業、畜産業を生業とする経営者の側面を強く示す家になっている。この、現代化し、貴族性を失ったヴォルフスエックを継ぐ予定であったのは、ムーラウの兄ヨハネスである。自らの一家の土着性、即物性、文化に対する無理解等に反発するムーラウは、ベルンハルト作品の主人公の典型である「精神的人間」であり、ローマにおいて、ある裕福な家庭の子弟、ガンベッテイにドイツ文学を教える私教師として生活している。またムーラウは、ガンベッテイの他に、彼と同種の間人間である、詩人のマリア、神父のスパドリニ、ツアッキ、アイゼンベルクラと結ぶ狭い交友関係の中で暮らしている。

テキスト中でムーラウは、ローマをヴォルフスエックの対極に位置づけ、ローマこそが自分の理想の居住地であり、そこにおける生活のみが自らの存在を可能ならしめるものであることを強調する。

そしてガンバッティやマリアに対し、ヴォルフスエックに対する誹謗中傷を延々とまくし立てるのである。しかしムーラウは、その言葉とは裏腹に、生活の基盤を完全にローマに移してしまっているわけではない。ローマにおいてムーラウは、言わば「高等遊民」的な生活を送っている。ムーラウは、家庭教師によって収入を得てはいる。しかし、彼のローマでの生活は、経済的には完全にヴォルフスエックからの仕送りによって成立している。また、ヴォルフスエックに帰郷する度に家族と争い、二度と帰らないことを決意しながらも、ムーラウは年に何度となく帰郷する。さらに、ムーラウが特に悪感情を抱く相手である彼の母親も、しばしばローマを訪れ、その都度ムーラウが母親と会い、買い物に付き合う様子などがテキストに描かれている。

このようなムーラウの存在性は、ローマ対ヴォルフスエック、すなわち、虚対実の対称性が生むバランスの上に成り立っている。この対称性は、精神性対即物性と言い換えることも出来る。『消去』のテキスト内における現在において、ムーラウはすでに四十八歳であり、長年を掛けてこのバランスを構築してきている。ムーラウは、持病のため心臓が弱っていることを医師から告げられており、余命が長くないことも宣告されている。このためムーラウは常々、家族の誰よりも早く自分が死ぬ見込みが高いと考えており、それ故現在の自分の生活構造を保ったまま人生を終えらるうと考えていた。そこに両親と兄の事故死の電報が届くのである。そしてムーラウは、自分がヴォルフスエックの相続人となる事実を突きつけられるのだ。

『消去』は、ムーラウが、ヴォルフスエックを相続することになってしまった、という事態に対してどう対処するかについてのテキストだと言っても過言ではない。キーワードの一つは、テキストの題にもなっている「消去」である。従来のベルンハルト研究においては、この消去が何を意味するのかという問題について、二つの方向性が示されている。

一つは、ムーラウの行う、ヴォルフスエックの寄贈である。ムーラウは言う、「ウイーンに在るアイゼンベルクに面会を申し込み、ヴォルフスエック全体を、それに付属する全てを含めて、無条件の贈与として、ウイーンのイスラエル文化事業団体に寄贈するつもりであることを告げようと、固く決意した」(650)⁽³⁾ (下線強調部は原文による)。ムーラウの友人であるアイゼンベルクによって、ムーラウのこの提案は、受け入れられたことが簡潔に述べられ、『消去』のテキストは終わる。両親と兄が亡くなった場合は、ヴォルフスエックの権利を全て単独で相続することを遺言によって決められていたムーラウが行うこの寄贈という破壊的な行為が、「消去」というタイトルに直接的にリンクするかのように見えるのは確かだ。ベルンハルト研究の第一人者の一人であるベルンハルト・ゾルクも次のように述べている。「両親が亡くなった時、ムーラウは自分のやり方で消去を完成させる。すなわち、彼は、イスラエル文化事業団体にヴォルフスエックを寄贈するのだ」⁽⁴⁾。

先祖伝来の所領が、領主の息子によって破壊的に相続されてしまうというテーマは、ベルンハルトの作品に度々登場する。『動揺』(1967)や、『訂正』(1975)がその代表例である。これらの作品では、テキストの筋が領主の代替わりまで展開することはなく、息子たちの反乱は未遂に終わる。『消去』のムーラウは、このようなベルンハルトの「息子たち」の企てを引き継ぎ、暴力的な破壊行為を実行するのである。ヴォルフスエックの寄贈先が、「イスラエルの文化事業団体」であることは、ムーラウの友人のアイゼンベルクがその団体の関係者であることを主たる理由とするものではない。ヴォルフスエックは、第二次大戦前後にナチズムと深い関わりを持っていた。特に戦後、ナチの戦犯である二人の元大区長(Gauleiter)が、数年間に亘りヴォルフスエックに匿われていたことはムーラウの中で強いトラウマとなっている。さらに、このような事実について、ヴォルフスエックの関係者は、固く沈黙を守っている。このヴォルフスエックの罪、延いてはオーストリア全体の罪

を白日の下に曝す示威的行為としての、ヴォルフスエック「寄贈」なのである。

ムーラウのこの行為は、『消去』のテキストにおいては確かに非常に目立つものだ。単にヴォルフスエックのみに関する私的な問題に止めず、オーストリア全体の過去の罪と関係づけることによって、『消去』のテキストがベルンハルトと同時代の一般的読者層に呼び起こす反応は、ベルンハルトの他の作品と同等かそれ以上にセンセーショナルなものとなっている。しかしながら、テキスト解釈の次元においては、この「寄贈」が、すなわち「消去」であるとしてしまうと、ある問題が生じるのだ。ベルンハルト・ゾルクも上記引用部の直後に次のように述べている。「ムーラウは、ウイーンイスラエル文化事業団体にヴォルフスエックを寄贈することによって、表面的な贖罪を行っているのだ」⁽⁵⁾。すなわち、このような形の寄贈を行うことによって、ヴォルフスエックを「消去」してしまうと、ヴォルフスエックがナチズムに荷担した過去、並びにその過去についての沈黙という罪も償われ、「消去」されてしまうことになる。そして、イスラエル文化事業団体は、ヴォルフスエックを、「それに付属する全てを含めて」受け取ることによって、その過去の罪まで背負うことになるのではないかと、という疑問も生じる。たとえヴォルフスエックを寄贈しても、その過去の罪は消えはしない。寄贈される側が被害者であってもそれは変わらない。単なる寄贈では、真の贖罪にはならない。ゾルクの言う「表面的な贖罪」とはそういう意味である。

一方で、ムーラウ自身は、自らの行う寄贈が「消去」を意味するとは一言も述べていない。「消去」とは、ムーラウが書こうとしているヴォルフスエックについての報告書のタイトルなのである。「消去と私はこの報告を名付けるつもりだ、と私はガンベッテイに言った、なぜなら私は実際、この報告の中で全てを消去するからだ、私がこの報告の中で書き留めるものは全て消去される、私の家族全てが消去され、家族の時間が消去され、ヴォルフスエックが、私の報告の中で、私のやり方で消去されるのだ、ガンベッテイ」(201)。フィクショナルな構えとして、『消去』のテキストは、ムーラウがヴォルフスエックについて書いた報告書である。このテキストに書き留めることによって、ムーラウは、ヴォルフスエックを完全に「消去する」と言っているのだ。

ムーラウの行う「寄贈」と比較して、ヴォルフスエックをテキスト化することによって「消去」するというムーラウの主張は分かりにくい。ムーラウは、「消去」のテキストの中で、ヴォルフスエックに住む家族について、誹謗、中傷、暴言の限りを尽くし、父や母がナチズムに荷担した過去を暴く。このように、ヴォルフスエックを否定的にテキスト化することが消去を意味するのだろうか。しかし、たとえそれが過去の暴露であっても、あるいは客観的事実とは言えないような中傷であっても、何事かについて記録することは、消去とは逆の行為となるのではないのか。ベルンハルト・ゾルクも次のように述べる。「この消去の作業はしかし、この作品のパラドクスの一つとして、言葉による再構成の中における、家族とヴォルフスエックの唯一可能な存続を意味するのである」⁽⁶⁾。ムーラウの計画する、ヴォルフスエックをテキスト化することによって消去しようとする行為は、逆にヴォルフスエックを保存し、永遠化することではないのか、とゾルクは述べているのだ。この問題をどう解釈するべきなのだろうか。

既存のベルンハルト研究においては、『消去』のテキストにおける、このような「消去」の問題についての考察が充分であるとは言えない。ゾルクが言うように、『消去』のテキスト、延いてはベルンハルトの作品全体は、パラドクスを明確な特徴の一つとする。ムーラウの言う消去も確かにベルンハルトのテキストが示すパラドクスの一つではある。しかしながら、それがパラドクスであることを指摘する所で「消去」の問題についての考察を終わりにするのではなく、もう一步踏み込んだ解釈が必要なのではないだろうか。本稿が展開する論述の方向性はこのようなものだ。

2. 寄贈について

本人の全く予期せぬ形でヴォルフスエックの相続人となったムーラウが遂行するヴォルフスエックの寄贈は、寄贈される側が、ナチズムの被害者であるユダヤ人の団体であるという、テキスト内の事実によって、必然的にヴォルフスエックの過去の戦争犯罪と結びつく。しかしながら、従来の研究で指摘されているように、ヴォルフスエックの消去がヴォルフスエックの寄贈を意味しているとするならば、ムーラウのこの行為はかなり怪しげなものとなる。ヴォルフスエックを寄贈することによって、その罪を消去し、自ら過去の罪と向き合う責任から逃れることがムーラウの真の目的ではないのか、ということだ。『消去』におけるムーラウのこの「寄贈」を、ヴォルフスエックの消去の問題とどう関係づけるべきなのだろうか。

『消去』のテキストの中でムーラウが繰り返し言及しているように、ムーラウは、ヴォルフスエックについて書き留めることによって、ヴォルフスエックを消去しようとする。前述したように、一見するとこれには矛盾がある。ある対象についての記述、報告、記録は、その対象の保存を意味すると考えられるからだ。しかし、この解釈は極めて伝統的かつ素朴なテキスト論に基づくものである。すなわち、ある客観的对象は、それについての報告的記述によって、テキスト内に再現され、テキスト受容者に伝達され得るというものだ。もちろん表現の巧拙によって、この伝達の正確度が左右されるという事態は生じ得る。しかしたとえ巧拙があろうとも、テキストの主機能は伝達にある、という考え方の構造自体に変わりはない。そしてこのような場合、上手く機能するテキストであればあるほど、受容者は、描かれた対象物を「有り有り」と現前しているかのように「感じるものだ」とされる。その際、テキストは、換言すれば、言語は、その存在が意識されないほどに透明化するのである。

ベルンハルトの作品は、作家としてのブレイクを果たした初期の長編小説『寒気』以来、このような伝統的なそれとは対極にあるテキスト観、言語観を示すものだ⁽⁷⁾。本稿は、ベルンハルトの作品における言語の問題を主テーマとするものではない。従って、これを簡潔にまとめるなら、ベルンハルトにとって、言語や言語から構成されるテキストは、テキスト外の対象を描写する道具ではない、ということになるだろう。ベルンハルトにとって、言語は、言語外の対象となら直接的な関係を持たないものである。言語は、言語外の事象から完全に遮断されている。それ故にベルンハルトのテキストでは、言語によるテキスト外の事実の描写も、無反省的には存在し得ないことになる。特に「客観的描写」という概念は、ベルンハルトによって徹底的に疑問視される。『消去』のテキストでは、ベルンハルトの初期から中期にかけての作品に比べて、このような言語批判的な側面は前面に出されてはいないと言えるだろう。しかしベルンハルトは、ここで自らの根本的な詩論を転換しているわけではない。故に、ベルンハルトの分身とも言えるムーラウが、テキスト化することによってヴォルフスエックを消去する、と繰り返し明言する時、この「消去」の問題は、テキスト論と密接に関係づけて捉えるべきものとなる。また、「寄贈」と「消去」の問題についても、テキスト論と関係づけて考察してみたい。

まず『消去』のテキストの構成について。ベルンハルトの長編小説に幾例か見られるように、『消去』は二部構成となっている。それぞれタイトルがつけられており、第一部が「電報」、第二部が「遺言」である。ヴォルフスエックで行われた妹の結婚式に参加したムーラウは、いつものごとくヴォルフスエックに対する怒りに満ちてローマに帰着し、旅の荷物も片付け

ないうちに、両親と兄が事故死したことを知らせる妹からの電報を受け取る。第一部におけるテキスト内の現在は、この妹からの電報を受けた時点から、その日の夜までの何時間かに集約されている。場所は、ローマにあるムーラウの住まいである。ムーラウは自分のデスクの上に家族の写真を置き、家族やヴォルフスエックについて、自分の子供時代からの家族に対する関係について、ヴォルフスエックの過去の戦争犯罪について、あるいはヴォルフスエックとは対極にあるローマでの生活や人間関係について、極めて主観的な感情に基づいて、約三百頁に亘るモノロゲ的なテキストを紡ぎ出していく。第一部におけるテキスト内の現在においては、ムーラウは、ローマの自分の住居から一歩も出ることはない。

第二部「遺言」は、第一部に比べてやや時間的、空間的な拡がりを持たされている。電報を受け取った日の翌朝、飛行機と列車を乗り継いでローマから移動してきたムーラウが、ヴォルフスエックに着く場面からテキストは始まる。最寄りの駅で列車を降りてからタクシーに乗ったムーラウは、ヴォルフスエックの麓の村の広場でタクシーを降り、徒歩でヴォルフスエックに入る。ヴォルフスエックの城は、本体である母屋としての居館の他に、子供用ヴィラ、オランジェリー、製酪場、庭師の館、猟師の館、そして、これらの建物を囲う城壁と門からなる巨大な複合体である。ムーラウが着いた時、両親と兄の遺体は既にオランジェリーに安置されている。ヴォルフスエック全体と、麓の村は、通夜と葬儀の準備一色に染まっている。ヴォルフスエックの相続人となったムーラウは、通夜と葬儀の文字通り「主役」である。ムーラウは、妹たちや義弟、葬儀にやって来る親戚や大司教、その他の弔問客と面会し、葬儀について打ち合わせ、さらにそれらの合間にヴォルフスエック内の建物を巡り歩く。第二部におけるムーラウのテキストはしかしながら、第一部同様ほぼモノロゲであり、会話や建物の描写が客観的に再現されることはない。一例を挙げるなら、妹たちとムーラウの会話が、直接話法の形でテキスト化されることは全くないのである。通夜を眠ることなく過ごしたムーラウは、翌日の葬儀を何とかこなし、最後の弔問客が帰った後、翌日の明け方まで妹たちと話しをする。この過程でヴォルフスエックの寄贈を決めたムーラウは、葬儀から二日後にアイゼンベルクと面会し、ヴォルフスエックの寄贈を申し入れる。寄贈を受け入れてくれた友人のアイゼンベルクにローマから短い謝辞を述べる文章で第二部は終わる。

このような第二部のテキスト内の時間と空間の規模は、第一部のそれが、ムーラウの住まいと数時間という場所と時間の範囲であったのに比べると、格段の差を示しているかのように見える。しかし、第二部においても、ムーラウは、彼がヴォルフスエックに到着する出だしの部分を除いては、ヴォルフスエックの城壁内から一歩も外に出ることはない。またテキスト内の現在も、実質的には、ムーラウがヴォルフスエックに到着した昼頃から、翌日の葬儀が終わる昼頃までの約二十四時間であり、ムーラウは、この間一睡もしていない。すなわち、第一部と第二部では数倍の規模の差こそあれ、限定性と凝縮性という点では同じ性質の時空間が舞台となっているのである。

このようなテキスト内の現在において、ムーラウの取る行動は極めて限定的なものとなっている。第一部では、電報を受けた時点から、ムーラウが具体的に取った行動といえは、両親と兄、妹たちの写真を机に並べることだけだ。後はひたすら部屋の中をうろつき回るか、窓から外を眺める程度である。ヴォルフスエックが舞台となる第二部ではムーラウは、両親と兄の葬儀の喪主であり、その役割を最低限果たしていく。しかし、実際の指揮を取っているのは妹たちだ。たとえ彼女たちの行動が、ヴォルフスエックに伝えられるマニュアル通り

であったとしても。ムーラウは、本来なら喪主の義務として勤めなければならないような、通夜にやって来る一般の弔問客の相手等という行為もほとんどしない。通夜と葬儀に関して、彼が出した具体的な指示は、母屋のバルコニーから下げられている弔旗の位置を直すことと、遺体の納められた棺の下に置かれた氷の補充に関する程度である。それ以外ムーラウは、ほぼ常に観察者の視点で全体の成り行きを眺めているだけだ。ムーラウは、妹たちに対して口を開かないわけではない。だがその内容は、両親や兄、親類たちに対する中傷、ヴォルフスエックの過去の罪の指摘、あるいは妹たちが、ムーラウと仲の良い従兄弟のアレクサンダーをヴォルフスエックの母屋に泊めず、村の宿に泊めたことについての詰問等であり、ムーラウの一方的な独白に近い性質のものとなっている。

このような、テキストに明示されたムーラウの外的な言動についても、かなりの程度の異常さを指摘することが可能である。しかし、『消去』のテキストには、ムーラウの内的思考に関して、容易な解釈を受け付けない、ある問題点がある。それは、一言で言えば、テキスト内のムーラウが示す、意思決定の逡巡性である。これは、前述したムーラウの言動とは異なって、テキスト内において明確には言語化されていない。故に既存のベルンハルト研究においては、ほとんど取り上げられていない問題である。

第一部の冒頭部で、両親と兄の訃報を受けたムーラウは、今の自分が混乱していないことを強調する。「電報を手に持ち、私は、落ち着いて、冷静なまま、私の書斎の窓に歩み寄り、全く人気の無いミネルヴァ広場を見下ろした」⁽⁷⁾。両親と兄の死がもたらす事態について、ムーラウは、冷静に判断を下すことの出来る状態にある。ヴォルフスエックには当分の間戻らないことを決意しながらローマに戻って来たとはいえ、両親と兄の事故死に際してヴォルフスエックに戻らないという選択肢はあり得ない。それはたとえムーラウが、一報に際して混乱していたとしても変わり様のない判断である。だが、第一部において、ムーラウは、ヴォルフスエックにその日の夜行列車で帰るか、翌朝一番の飛行機で帰るか、決断することが出来ない。結局ムーラウは、決断出来ないままに、夜行列車で帰ることの出来る時間は過ぎていく。これが第一の「逡巡」である。

第二の逡巡はさらに規模が大きく、『消去』のテキスト構造全体の決定要因ともなっている。従ってより詳細にテキストを追いつながり確認していきたい。

両親と兄の死によって生じる不可避的な事態、それはムーラウが、ヴォルフスエックの相続人となることである。ムーラウのヴォルフスエックに対する個人的感情がどのようなものであろうと、また、彼の「精神的」生活を維持するためにローマがいかに必要不可欠なものであろうと、ヴォルフスエックの相続人となった以上、ヴォルフスエックを今後どうしていくかについての検討および決断は、ムーラウにとって避けられないものだ。ローマで電報を受けたムーラウも、電報を読んだ瞬間からそのことについては理解している。ローマで、ガンベッテイと文学について話しをする代わりに、「私の妹たちと、両親や兄の葬儀について、そして彼らの遺したものについて話しをしなければならないだろう」(11)。しかし同時にムーラウは、ヴォルフスエックをどうするかについての考えを持つことは自分には出来ないことだと明言する。「私は、両親と兄の死がもたらす結果について明らかにしようとしたが、結論は出なかった」(11)。その後ムーラウの思考はこの問題から逸れ、自分と家族の軋轢を中心としたヴォルフスエックにおける自分の過去についての想念に移っていく。この部分から四十数頁後に、このムーラウの態度について再び次のような箇所が現れる。「ヴォルフスエック

クからの電報、その恐ろしさの全貌を私はまだ把握出来ていなかったが、そこから私は、叔父のゲオルクのことを考えることによって、気を逸らせようとした」(53)。あるいは、「今から私に何が起こるのかについては考えてはならなかった」(54)。すなわち、相続人としてこれからどうなるのか、そしてヴォルフスエックについて今後どうしていくのかについて、ムーラウは自らの考えを徹底的に詰めていくのではなく、問い自体を保留状態に置くのである。あるいは保留状態にあるとするのである。このムーラウの姿勢は第一部を通して変わることはない。

ヴォルフスエックの相続人として妹たちと対面せざるを得なくなる第二部においては、ヴォルフスエックを今後どうしていくのかについての問題を、第一部のように避けることは出来ない。ヴォルフスエックの建物内に住み込みで働く、メイドや庭師、猟師などの使用人たちは言うまでもなく、ヴォルフスエックが運営する鉱山業、林業、畜産業、農業に従事する麓の村の関係者の全てはヴォルフスエックによって生活を支えられている。ヴォルフスエックの当主は、この巨大な経済活動の中心であり、単なるシンボルではない。また経済活動は日々動いており、意思決定者の不在は可能な限り短期間で終わらせなければならない。このような事情は、ムーラウも彼の妹たちも当然ながら十分過ぎるほど理解している、また互いに理解していることを前提にしているのである。ムーラウは、単に通夜と葬儀を主催するためにヴォルフスエックに戻ってくるわけではない。

このような状況下においてムーラウの妹たちは、ムーラウの帰りを待っている。通夜と葬儀は実質的に妹たちが取り仕切っている。それに関してムーラウの判断を仰ぐ必要はない。彼はただ確認し、承認すればいいだけだ。妹たちがムーラウの口から出る言葉として待っているものは、何よりもヴォルフスエックの今後をどうするのかについてなのである。これに対してムーラウの取る態度は、第一部と同様、保留と引き延ばしである。ヴォルフスエックに着いて後、妹たちと最初に話す機会にムーラウは言う。「しかし彼女たち自身が、これからの事を知り得ないのと同様に、私自身もそれについては知らなかった」(386)。ムーラウが「知らない」理由は、それについては「考えていない」(同)からであると言われる。このムーラウの態度は、妹たちにとっては無責任の極みだ。ムーラウの立場は、妹たちと「同様」のものではない。ムーラウは遺言によって、ヴォルフスエックの全てについて決定出来る唯一の相続人に指定されている。妹たちが、ヴォルフスエックの将来について「知らない」のは、彼女たちに決定権がないためである。対してムーラウは、全権を持つ相続人としてヴォルフスエックの今後を決定する責任を持つ。それは、「知らない」あるいは、「考えていない」という言葉で回避出来る性質のものではないのである。全てはムーラウ次第なのだ。

ムーラウは、第二部のテキスト内の現在の中では、妹たちに対するこの態度を貫く。また妹たちに対してのみならず、自分、あるいは、テキストの受容者に対して、自分が今後どうすべきか分からない、という姿勢を取り続ける。ムーラウがヴォルフスエックに帰着した日の夜、ローマから、ムーラウの友人であり、理解者であり、同時に長年ムーラウの母の愛人でもあった神父のスパドリニがヴォルフスエックに到着する。ムーラウは、このスパドリニの到着を待っている。「私自身が見つかることの出来ない出口を、彼は今、私に示してくれるべきだ」(507)。さらに、弔問客の相手が一段落し、ムーラウと妹たちだけが同席する遅い夕食の場において、妹たちはヴォルフスエックの今後について、ムーラウを問い詰めた際にも、「しかし私は、彼女たちの問いの一つとして答えることは出来なかった、率直に言って、私に

は答えが分からなかったからだ、なぜなら、ヴォルフスエックの今後について、私は彼女たちと同じくらい何も知らなかったからだ」(527)という反応を示す。そして、葬儀も終了し、主な弔問客たちもヴォルフスエックを離れた後、ムーラウは夜遅くまで自室に一人閉じこもり、「この時間の間中、私は自分がヴォルフスエックをどうするのかについて考えた」(650)。この後、妹たちとの最後の話し合いの場でもムーラウは、「ヴォルフスエックがどうなるのか、自分には分からない、この件に関しては、自分はどんなイメージも持っていない」(同)と答えるのだ。『消去』のテキストは、本稿が底本とするズーアキャンプ版では651頁が最終頁であり、故にムーラウの妹たちに対するこの態度の未決定さはテキストの最後まで貫かれていることになる。

ムーラウがヴォルフスエックの相続人であることは、ムーラウにとって変更可能な事柄ではない。ムーラウは既に若者ではなく、医師から余命宣告を受ける病身でもある。彼のこれまでの生活のあり方から考えても、相続人としてヴォルフスエックを今後どうするのかについての選択肢は、ムーラウにはそれ程多くはない。ムーラウにとって、亡父のように、あるいは誕生時から後継者であることを定められていた兄のように、ヴォルフスエックを運営していくことは事実上不可能だからだ。このような状況下で、ムーラウは、妹たちに繰り返し述べているように、自分に降りかかってきたこの事態について本当に何も考えていないのだろうか。ヴォルフスエックでの通夜の食事の場面で、妹たちには、何も分からないと言いながらムーラウは次のようにも考える。「両親と兄が亡くなった場合、ヴォルフスエックは自動的に私のものとなる、その全てが。妹たちに、彼女たちに帰属すべき権利を認め、ヴォルフスエックに居住することを許すか、あるいはその相当分を現金で支払うかの義務は負っているが。そして、私は、最初から、彼女たちとヴォルフスエックに住むことではなく、現金で支払うことに傾いていた」(527)。さらに、「そして、私は、死の知らせを受けた瞬間には、既に現金で支払うことに決めていた、ヴォルフスエックの分与ではなく」(527f.)とも述べる。すなわち、ムーラウは、両親と兄の事故死を知らせる電報を受けた瞬間には、妹たちをこのままヴォルフスエックには住ませないこと、つまりヴォルフスエックを今までのようには存続させないことを決心していたことになる。そして、妹たちの助力がなければ、葬儀すら執り行うことの出来ないムーラウに、ヴォルフスエック全体を運営していくことなど到底不可能である。これは決心の問題ではなく、ムーラウにとっての事実である。結果としてムーラウは、ヴォルフスエックを何らかの形で処分せざるを得ないことになる。このことも、ムーラウが電報を受けた瞬間から決定づけられているのだ。

やや詳細にテキストの内容を追ってきたが、ここから先は解釈の問題になるだろう。ムーラウは、ヴォルフスエックの将来について、テキストが開始された時から考えを決めていた。では何故、妹たちに対してこれを最後まで明かさないのか。ムーラウと彼の家族の関係は、最悪に近いものであった、とムーラウは言う。妹たちについても例外ではなく、家族内の立場上、彼女たちは、ムーラウに対して、ムーラウの母ほどの影響力を持たないとはいえ、妹たちの自らに対する態度は常に「嘲笑的」だったとムーラウは述べる。このような、ムーラウと妹たちとの関係性から判断すれば、ムーラウがヴォルフスエックから彼女たちを追い出そうとしていることを彼女たちに告げないのは、ムーラウの彼女たちに対する復讐的な感情から出ていると見なし得るかもしれない。今までは何の決定権もない厄介者であった自分が、今や全てを決める権利を有する者であることを可能な限り長く見せつけるという意味で。そ

して、おそらくその要素は全くないわけではないだろう。しかし、ムーラウは、ヴォルフスエックをどうするかについての決断を、妹たちに対してのみ表明しないわけではない。上述したように、電報を受け取ってからヴォルフスエックに移動し、通夜と葬儀を執り行い、弔問客が皆引き上げた後の妹たちとの話し合いの場面において、テキストの分量としては五百数十頁の後に、ヴォルフスエックの将来についての決意が、初めてテキストに書かれるのである。つまりムーラウは、テキストの受容者に対しても、そして自分自身に対してもヴォルフスエックの将来、すなわち寄贈について語ることを延期し続けるのである。これは、ムーラウの復讐心からは説明することは出来ない問題である。

このようなムーラウの語りの性質は、極めて特徴的なものだ。時系列的に見れば、『消去』に言及される外的な事象は、ムーラウの妹の結婚式、ローマへの帰宅、両親と兄の事故、ムーラウへの電報、ヴォルフスエックへのムーラウの到着、通夜、葬儀、ムーラウとアイゼンベルクの会談、ヴォルフスエックの寄贈の申し出と受諾が、テキスト内の現在およびその前後直近の出来事となるだろう。そしてムーラウの言によれば、ムーラウは、事故の電報を受けた瞬間には、ヴォルフスエックから妹たちを追い出すことを決めている。そして自分がヴォルフスエックに住むことが不可能であることも、彼にとっては、このこと以上に明らかであっただろう。ところが、ムーラウのテキストを流れる「時間」は、このような外的な事象を統括する時間とは異なる。ムーラウは、電報を受けた瞬間から、葬儀の終了後に、ウイーンにいるアイゼンベルクに会うために、ヴォルフスエックを離れる時まで、ヴォルフスエックの将来についての決意を言語化することを延期することによって、テキスト内の現在を流れる時間を、その前後の事象から切り離している。あるいは、電報の受け取りの瞬間から、実際にはゼロであった決意の瞬間までの時間を引き延ばすことによって、一種の真空的な時空間を生じさせ、そこにテキストの言語を成立させている、とも言えるだろう。テキストのこのような性質についての詳細な考察は、次章に委ねるが、ここで重要なことは、このテキスト内の「時間」は、両親と兄の事故そのものと、ヴォルフスエックの寄贈を直接の対象としていないことである。『消去』のテキストの現在は、事故についての電報の受け取りから、ヴォルフスエックの寄贈を決意するまでを範囲としている。その前後にある、事故と寄贈を範囲とするわけではない。これら二つの出来事は、テキスト外の事象を流れる時間に接続する接点であり、ムーラウのテキストは自らの性質を維持するためには、それらに触れることは許されないのである。それ故にムーラウは、ヴォルフスエックの寄贈について、妹たちの蔑視に耐えながらもひたすら言及を避けるのだ。

ヴォルフスエックの寄贈は、テキスト内の現在の後に置かれる事象である。寄贈に関しての言及が、テキストから排除されるのと同様に、テキスト内の現在の前の事象である、両親と兄の事故に対しても、テキストからの排除の動きが見られる。テキストの第二部で描かれるムーラウの常軌を逸した行動がそれにあたる。ヴォルフスエックに着いたムーラウは、母屋の台所で、メイドが読んでいた新聞に異常な執着を見せる。事故を扱う記事が読みたくて堪らないのだ。しかし彼は同時に新聞を読むまいとする。別の場面で、同席した義弟に新聞を読むことを勧め、ムーラウに遠慮することなく新聞を読む義弟に、憐れみと侮蔑の視線を送るのである。また、事故死したとはいえ、遺体に外傷の跡がほとんどない父親と兄は、棺の蓋を開けられた状態で安置されているのに対し、事故でほぼ断首されてしまった母親の遺体を納める棺は固く蓋が閉じられている。ムーラウは、この母親の棺の蓋を開けたくて堪ら

ない衝動に駆られる。そして何度も自ら実際に蓋を開けようとするのである。これらの奇妙なムーラウの行動は、従来研究においては、心理的に解釈される場合がほとんどだ。しかし、本稿で論じている、テキスト内の時間の範囲の問題と関係づければ、別の解釈が可能になる。すなわち、テキスト内のムーラウは、両親や兄の事故からも遮断されているのである。ムーラウにとっても、このような状態は不自然なものだ。自らが作り出した状況でありながら、一方では彼自身も、この宙づりのような状態からは解放されたいと願わざるを得ない。故に、テキスト外の時間につながる事故の記事や、事故を象徴する母親の遺体に執着し、衝動的にそれらと繋がろうと試みるのである。しかし、ヴォルフスエックの将来についての言及を延期し続けることによって、未来と遮断されているテキスト内の現在に存在するムーラウには、過去の時間への接続もまた許されないのである。

『消去』のテキストの構造をこのように捉える時、ムーラウの行うヴォルフスエックの寄贈と「消去」の関係は自ずから明らかとなる。ムーラウは述べる。自分は、ヴォルフスエックについて書くことによって、ヴォルフスエックを消去するのだ、と。そのテキストは、構造的に、両親と兄の事故、並びにヴォルフスエックの寄贈を枠外の事象とするものだ。従って、ムーラウの行うヴォルフスエックの寄贈は、彼のテキストの対象外の出来事となり、その結果、「消去」とは直接的な関係を持たないことになるのである。

3. 『消去』のテキストの性質―「反自伝」

前章において、『消去』のテキスト構造の特殊性を確認し、そこからムーラウの行うヴォルフスエックの寄贈が、テキストの直接的な対象の枠外の事象であることを結論づけた。本章では、ムーラウによって「ヴォルフスエックの全てを消去する」とされる『消去』のテキストの性質について考察を進めていきたい。

ヴォルフスエックに住む親族の中で、ムーラウと唯一良好な関係にあった人間は、ムーラウの父の弟である、ムーラウから見て叔父にあたるゲオルクである。彼は、ムーラウ同様「精神的人間」であり、家族内では浮いた立場に置かれていた。叔父ゲオルクは、彼の父、ムーラウにとっての祖父、が亡くなった際に自らの権利分を現金で受け取ることを求める。そして、それを機にヴォルフスエックを離れ、南仏に移住し、相続した財産を投資することによって、経済的にも余裕のある生活を送っていた。彼は、ムーラウの資質を理解し、彼に助言を与えるメンターであり、その生活スタイルはムーラウにとって一つの理想像となっていたはずだ。テキストには明示されていないが、ムーラウが、もし自分の将来をイメージすることがあったとすれば、叔父のゲオルクのように財産分与を受けて、ヴォルフスエックから経済的にも独立する方向のものであったはずである。

この叔父ゲオルクも、ヴォルフスエックについてのテキストを書いていた、とされる。ムーラウは、このテキストの存在を直接目にしたわけではないが、それは叔父がまだヴォルフスエックにいる頃から、二十年以上に亘って書き続けられていたとされる。そのタイトルは、「反自伝」(188)とつけられていた。叔父が急死した後、叔父のこのテキストは行方不明となる。ヴォルフスエックについての真実が書かれていたとされるこのテキストを破棄したのは自分の母ではないか、とムーラウは疑っている。そして、この叔父の「反自伝」が存在しない今、叔父に代わってテキストを書くのは自分しかいないとムーラウは語る。

ヴォルフスエックについてムーラウの書くテキストの性質は、従って、「消去」に関係する

ものであると同時に、「反自伝」的なものでもあることになる。では、この「反自伝」とは何を意味するのだろうか。キーワードは「反」（原語では、Anti-）であろう。

ムーラウと同様な立場、性格、家族関係、精神的能力を持つゲオルクのテキストが、ヴォルフスエックにとって不都合な内容を含んでいたであろうことは間違いない。とりわけムーラウよりも一世代上の人間である叔父は、ヴォルフスエックとナチズムの関係について、ムーラウよりもさらに詳しく知っていたはずである。これらの事実を書き留めることが叔父の目的の一つであったと推測される。だが、これだけの理由で、叔父のテキストや延いてはムーラウのテキストは、「反自伝」となるであろうか。そうではない筈だ。そのようなテキストを、「反ヴォルフスエック」と呼ぶことは可能であろう。しかし、もしヴォルフスエックの人間たちにとって不都合な事実が書かれていたとしても、それらが客観的事実としてテキスト化されているならば、「自伝」は「自伝」であることに変わりはない。

叔父ゲオルクの、そしてムーラウのテキストが、ヴォルフスエックの真実を暴露する、反ヴォルフスエック的内容を持つものであることは確かである。しかしそれは何よりも、通常の「自伝」的テキストの前提とも言える客観的描写のスタイルに対するアンチのテキストなのである⁽⁸⁾。すなわち徹底的に主観的なスタイルでテキスト化されているのだ。繰り返しになるが、この主観的なテキストは、客観的事実を含まないわけではない。ムーラウや叔父のゲオルクにとっては、ナチズムに荷担したヴォルフスエックの過去、ベルンハルトにとっては、同じくナチズムに関する、オーストリアの過去の罪がそれにあたる。しかし彼らは、それを、自らの感情とは無関係な客観的事実としてではなく、自らの主観的感情、すなわち、家族に対する反感、国家に対する反抗の奔流の中に混じえてテキスト化するのである。これが、叔父ゲオルクの「反自伝」、そして、それを引き継ぐムーラウの「消去」のテキストの根本性質なのだ。

ムーラウのテキストが成立するためには、このように、反感としての主観的感情が必要不可欠なものとなる。そして、頁数にして六百五十を超えるテキストを支えるためには、膨大なエネルギーの主観的感情がなければならない。さらにこの感情は、「愛」のように主体的に生じるものではなく、「反」すなわち、何らかの圧力の存在が前提となる類いのものだ。ムーラウの長大な「反自伝」的テキストを支えるためには、巨大な圧力が必要になる。ムーラウにとっては、それがヴォルフスエックを相続することによって生じる圧力なのである。

ムーラウにとって、ローマでの生活を捨て、妹たちと共にヴォルフスエックに住むこと、さらにただ住むだけではなく、父親のようにヴォルフスエック全体を管理、運営することなどはあり得ない選択肢である。感情的ではあるが、極めて明晰な精神を持つムーラウは、両親と兄の事故死の電報を受けた瞬間にそのことを認識する。ヴォルフスエックを相続することは、遺言によって決定されたことだ。そこから逃れる術はない。ヴォルフスエックに住む家族、妹たちと義弟、ヴォルフスエックの過去、そしてヴォルフスエックに関係することで生計を立てている全ての人々を含めて、ヴォルフスエックを受け入れることなど、四十八歳になるまで高等遊民的な生活を送ってきたムーラウには不可能なことだ。これをムーラウは瞬時に理解する。ヴォルフスエックを何らかの形で放棄せざるを得ないことは、ムーラウにとっては最初からの決定事項なのである。

しかし、ムーラウは、自らの、この問題に関する判断をいったん停止する。自分の出自であるヴォルフスエックとは何ものなのか、自分にとっての家族とは、ヴォルフスエックの罪、

オーストリアの過去と現在の罪とは何なのかについてのテキストを成立させるために、ヴォルフスエックの相続という最大級の負荷を、ヴォルフスエックの処分に関する判断を延期することによって、自分にかけるためにそれを行うのである。ヴォルフスエックの相続という巨大な重荷に押しつぶされないためには、ムーラウは全力で反発するしかなく、そこに客観的な描写の成立する余裕はない。『消去』のテキスト全体は、このような「反」の性質に貫かれているのである。

このように、極めて動的な性質を持つ『消去』のテキストが、限定された範囲の時間と空間を対象とすることは当然の帰結であるとも言えるだろう。そうでなければ、この圧力を、一個人の精神力で支えきことは不可能なのだ。これはベルンハルトの作品全体に共通の傾向でもある。『消去』においても、特に第一部は、空間としては、ローマでのムーラウの住居の、主としてムーラウの書斎であり、時間は、電報を受けた日の午後から夜にかけてという限定性を示している。その一方で、第二部の舞台は、ヴォルフスエックの建物群全体であり、時間についても、ムーラウのヴォルフスエック到着から翌日の葬儀終了後までの約二十四時間となっている。この第二部は、特に空間的には、一定の拡がりを見せており、これらの建物群にリアルな空間との接点を指摘する研究も存在する⁽⁹⁾。

確かにムーラウは、ヴォルフスエックに到着して後、妹たちにヴォルフスエックの将来について、肝心な部分は黙したままである一方で、子供用ヴィラの再建を口に出したりもする。子供用ヴィラは、ヴォルフスエックの建築物の中でも、ムーラウにとっては、子供時代の思い出に接続する機能を持つ重要なものだ。ムーラウにとって、そしてベルンハルトにとっても、小学校に上がる前後までの子供時代は幸福な思い出となっている。そのような建物の再建を口にするのは、ヴォルフスエックの主として、ムーラウがヴォルフスエックに留まろうとしていることを意味するのではないだろうか。そして、『消去』のテキストにおいては、これらの場所、すなわち、ヴォルフスエックの建物群は、想起を通してリアルな現実との接点となっているのではないだろうか、という問いも可能であるように思われるかもしれない。

だが、テキストに描かれる、ヴォルフスエックに対するムーラウの視線は、リアルな対象に向けられるそれではない。ヴォルフスエックに到着する時、ムーラウはわざわざ城の麓の村にある広場でタクシーを降り、徒歩で城に向かう。そして城壁の門から中を覗き込んだムーラウは、すぐに遺体が安置されているオレンジリーや、妹たちがいるであろう母屋に向かわずに、城壁の陰にもたれたままヴォルフスエック内で進行している作業を観察するのである。その際、観察者であるムーラウの目には、ヴォルフスエックで進行している出来事は、まるで劇のように映り、その結果、彼の目には、ヴォルフスエック全体が巨大な劇場として現前するのである。「オレンジリーの周囲で起きていることの劇場性によって、私が劇を見ているのだということが明白に印象づけられた (...)。この劇にはしかし、主役が欠けている」(318f.)。この劇の「主役」とは、相続人であり、喪主であるムーラウのことである。ヴォルフスエックの建物群は、当然ながら、書き割りではない。領主の城として、何百年もの歴史を持ち、ムーラウの子供時代ともつながりを持ち、さらにナチズムとの関係性という負の過去を持った実存在である。ところが、テキスト内のムーラウの目には、ヴォルフスエックは、劇場として映るのである。

この矛盾についてもやはり、『消去』のテキストの基本性質から説明可能である。ムーラウは、ヴォルフスエックの相続人としてヴォルフスエックに入る。その後葬儀の終了まで、ヴォル

フスエックをどう処理するかについての判断の表明が先送りされることによって、極めて人工的な時間と空間が生じる。この空間は、ヴォルフスエックの巨大な圧力に対して、それに反発するムーラウのテキストの力が一時的に釣り合うことによって生じるものだ。このような、ムーラウの主観的テキストが生む人工空間の中に、ヴォルフスエックの建物群や人々は存在するのである。そしてムーラウは、この人工的な空間の中を移動し、妹たちと会話をするのだ。従って、もし仮にムーラウがこのような状況下で子供用ヴィラの再建を口にしたとしても、それは現実のプランとは何の関係もない、ただの台詞にならざるを得ない。また、このようなテキストに現れる建物群も、リアルな現実への接点の場とはなり得ない。それらは、ムーラウの主観の中では、劇場の舞台にある書き割りとならざるを得ないのである。第二部の中でムーラウが再三に渡って、ヴォルフスエックの劇場性を指摘し、通夜と葬儀を一つの劇として描くこと背景はこれである。さらに補足的なエピソードを挙げるならば、通夜から葬儀の始まる間に、そのための時間はあるにもかかわらず、ムーラウは一睡もすることが出来ない。ムーラウはかねてから不眠症であり、この箇所も、単にムーラウの体質を示しているものとして読めば、何気ない描写となるだろう。しかし、この時のムーラウにとって、ヴォルフスエック全体は、いわば劇場のセットである。人は、セットの上でも、演技として行動し、台詞として言葉を口にするには出来るが、セットの上で役者が実際に眠ることは出来ない。睡眠は、日常的な空間でのみ行い得る行為なのである。この時のヴォルフスエックにいるムーラウは、日常的な空間からは切り離されており、それ故眠ることは許されないのである。

4. テキストと「消去」の関係性

以上、ベルンハルトの『消去』における「消去」の問題について、主にテキストの構造と性質の面から考察を加えてきた。本稿の結論としては、以下のようなになる。

まず、テキストの構造から判断して、『消去』のテキストの対象は、ムーラウが電報を受けた瞬間から、両親と兄の葬儀が終わり、ムーラウがヴォルフスエックの寄贈を決意する瞬間までに限定されるものであること。従って、ヴォルフスエックの寄贈そのものは、『消去』のテキストの対象外の事象であり、ムーラウが、テキスト中で、ヴォルフスエックの消去は、ヴォルフスエックのついて自らが書くテキストによって果たされると明示している以上、「消去」から切り離して捉えるべきだということだ。これについては、前章で論じたテキストの性質からも論証可能である。ムーラウのテキストは、ヴォルフスエックの相続人としてのムーラウが受ける巨大な圧力に対する反発を原動力として成立しており、寄贈を言語化した瞬間にこの作用、反作用の力学関係は失われてしまう。従って、ヴォルフスエックの寄贈は、ムーラウのテキストに取り込むことの出来ない要素なのである。

次に、ヴォルフスエックを「消去」するために書く、とされるテキストの性質を明らかにした。それは、一言でまとめるならば、「反」のテキストである。この「反」には、様々な意味が複合している。それは、ムーラウの叔父ゲオルクが企図したように、「反自伝」であり、ムーラウの抱く、「反ヴォルフスエック、反オーストリア」の感情であり、ヴォルフスエックの圧力とムーラウのテキストの反発力が釣り合う中に生じる、リアルな現実から切り離された「反転空間」なのである。

では、このような性質を持つテキストと「消去」の関係はどのようなものなのだろうか。「消去」は、ムーラウのテキストにつけられる予定のタイトルである。また、ムーラウは、ヴォ

ルフスエックをテキスト化することによって、消去することを決意する。まず、タイトルに関して指摘可能なことは、消去と反自伝の関係性だ。伝統的なジャンル概念においては、自伝はテキスト作者自らの半生を客観的に描写し、記録するものである。ムーラウのテキストは、このような「自伝」とは逆の性質を持つものであり、「記録」に対立する概念として「消去」のタイトルをつけられている、と考えられる。次に、「書くことによる消去」に関しては、このような性質のテキストの寿命そのものとの関係性を挙げる事が出来る。ムーラウの、そしてまたベルンハルトのテキストは、客観的事実とのつながりを切断され、自律的かつ主観的に存在する言葉の流れである。このようなテキストは、テキストの開始と同時に存在し始め、終了と同時にその存在を終える。ちょうど音楽がそのような性質を強く全面にだす芸術ジャンルであるのと同様に。音楽は完全に線的な表現であるが、文学テキストにおいては空間描写も可能である。『消去』のテキストにおいても、ヴォルフスエックの建物群によって、強い空間性が構築されている。通常のテキスト概念から見れば、この中に再現された空間は、外部の事実を保存する機能を持つものだ。しかし、『消去』のテキストに生じる空間は、反転空間であり、テキストの終了と共にその存在を終える。すなわち、消去されるのである。ムーラウの言う、ヴォルフスエックについてのテキストを書くことによって、ヴォルフスエックの全てを消去する、ということの意味は、このようなものであると結論づけられる。

註

- (1) "Antiautobiografie. Zu Thomas Bernhards >Auslöschung<." Herausgegeben von Hans Höller und Irene Heidelberger-Leonard. Frankfurt am Main 1995.
- (2) Vogt, Steffen: Ortsbegehungen. Topographische Erinnerungsverfahren und politisches Gedächtnis in Thomas Bernhards "Der Italiener" und "Auslöschung". Berlin 2002.
- (3) 本稿においては、『消去』のテキストとして次のものを底本とする。以下、テキストからの引用部には、末尾に頁数のみを記す。なお、一次文献、二次文献を問わず、本稿における引用は全て原語は独語であり、邦訳は全て拙訳による。
Bernhard, Thomas: "Die Auslöschung. Ein Zerfall." Suhrkamp Verlag. Frankfurt am Main 1986.
- (4) Sorg, Bernhard: Thomas Bernhard. München 1992, S. 124.
- (5) Ebd., S.125.
- (6) Sorg, Bernhard: Die Zeichen des Zerfalls. Zu Thomas Bernhards "Auslöschung" und "Heldenplatz". In: Text und Kritik 43 Thomas Bernhard. München 1997, S. 75-87, S.81.
- (7) 拙論、「トーマス・ベルンハルトの『歩く』について」岐阜聖徳学園大学外国語学部紀要 55 集、1 頁～13 頁参照。
- (8) 拙論、「トーマス・ベルンハルトの自伝について」、『リベラル・アーツの挑戦』彩流社 2018 年春発行予定、を参照。
- (9) 註 (2) に挙げた Vogt の研究を参照。